中世シチリア王国とアラビアン・ナイト

高山　博

その王国との出会いは、印象的なものだった。図書館の薄暗い一室で目にした英文の書物には、色鮮やかな花が咲き乱れ、めずらしい果物が実る南国の楽園で、美しいイスラム教徒の侍女たちにかしずかれるキリスト教徒のノルマン王たちが描かれていた。蛍光灯から漏れてくる小さな音以外には何も聞こえてこない静寂の中で、私は一心にその書物に読みふけった。青空を背に白く輝く宮殿やモスク。私の頭の中では、いつしか、書物に記された王国のイメージがかつて読んだアラビアン・ナイトの世界と重なり合っていた。

この書物には美しい図版がいくつか挿入されており、そのうちの一つは、王冠をかぶったままベッドに横たわるキリスト教徒の王と、その周りを囲むターバンを巻いたイスラム教徒たちを描いていた。イスラム教徒の一人はガラスの瓶を高くかかげ、別の一人はアストロラーベ（天体観測儀）を手にぶらさげている。この二人は、医者と占星術師を表していた。イスラム教徒たちに囲まれて最期の時を迎えようとしているキリスト教徒の王の姿は、私に強い印象を与えると同時に奇妙で不思議な感覚を残した。そして、この感覚は、もう一つ別の図版によってさらに強められることになる。そこには、王宮の書記として、ターバンを巻いたイスラム教徒たち、ヒゲをのばしたギリシャ人たち、そしてラテン系の若者たちが二名ずつ描かれていたのである。

私の心を捉えたのは、異なる文化に属する人たちが一堂に会したこれらの絵だけではない。別のページには美しいエキゾチックなモザイク画が挿入されていた。その一つには砂漠のオアシスを思わせるような南国の木々のあいだに豹と孔雀が描かれ、別の一つには旧約聖書のノアの箱船の物語が描かれていた。さらに、別の一枚には、ビザンツ皇帝の衣装を身にまとった王がキリストから王冠を受ける場面が描かれていた。

これらのモザイク画は、私の好奇心を強く刺激した。シチリアのノルマン人の王国で作られていながら、イスラム文化とビザンツ文化の影響を色濃く漂わせていたからである。

この美しいモザイク画を残した王国は、わずか五十年ほどの繁栄の後、消えていった。後世の人々に幻想的で美しいイメージを残し

て消えていったこの王国はいったいどのような王国だったのだろう。本を読み進めるうちに、私の頭には、多くの疑問が浮かんでいた。何故、シチリアには、このような文化が生まれたのか。その文化を支えていたのはどのような人々だったのか。異なる文化的背景を持つ人々を、ノルマン人の王はどのようにして治めることができたのか。異文化集団は何故共存することができたのか。そして、王国は何故わずか五十年ほどで消えていったのか。

私がこの書物に出会ったのは、まったくの偶然からではない。イスラム文化と西洋中世文化の両方に関心のあった私は、両文化の接触や交流に関わる書物を探し求めていた。そして、次第に、両文化が接触していた中世スペインと中世シチリアに魅かれるようになっていったのである。

いうまでもなく、スペインは、八世紀初頭から十五世紀末までの八百年近く、イスラム教徒の国々を抱えており、十五世紀末にグラナダ王国が滅亡するまで、イスラム教徒とキリスト教徒が接触する場であった。グラナダの丘にそびえるイスラム教徒の赤い城、アルハンブラ宮殿は、その華麗なイスラム文化の存在を今に伝えている。水と植物と建物が見事な調和を見せるアラヤネスの中庭、美しく手入れされた庭園や王の夏の別荘として作られたヘネラリフェ。夜に訪れれば、静寂の中で小さな水音を聞きながら、月の光に照らされて白く浮き上がる宮殿を目にすることができる。アラビアン・ナイトの世界を彷彿とさせるイスラム文化の結晶だ。

私が、この美しいイスラム文化の遺産をもつスペインではなく、中世シチリアを選ぶことにしたのは、こちらの方が研究者が少なく未知の部分が多かったからである。シチリアには、ワシントン・アービングの『アルハンブラ物語』もフランシスコ・タレガの『アルハンブラの想い出』もない。しかし、こちらには、まだ誰も答えることのできない多くの謎がある。私が今でもこの王国の研究を続けているのは、その謎を解く喜びを味わえるからだと思う。

今日までパレルモに残る、イスラム文化、ギリシャ文化、ラテン文化が混じり合った異国趣味的な建築物や美しいモザイク画は、スペインと同じように多くの人々を魅了し続けてきた。イタリア旅行中にシチリアを訪れたゲーテは、この島に強く心を引かれ、その『イタリア紀行』（相良守峯訳、岩波文庫）の中で「シチリアなしのイ

日本を知り、日本文化を知る
新・民俗辞典誕生

日本民俗大辞典 上・下

福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司
神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編

〈上〉11年9月刊行
〈下〉12年3月刊行予定

総項目6300、民俗学の蓄積と歴史学等の成果から日本列島の多様な民俗文化を解明。従来の民俗学の枠組を越える最高水準の大辞典。四六倍判・函入／『内容見本』送呈
完成記念特価＝各18000円
（12年9月30日まで）
12年10月以降＝各20000円

民俗学の資料論 歴博大学院セミナー

国立歴史民俗博物館編　さまざまな民俗文化へのアプローチを紹介し、21世紀へ向けた民俗学の可能性を探る。　四六判／2000円

歴史文化ライブラリー
9月の新刊／各1700円

㊻ 縄文の実像を求めて

今村啓爾著　平和で豊かなイメージの縄文時代。繁栄の側面だけでなく、その限界、つぎにくる弥生時代を見通して、その個性を探る。

㊼ 太平洋戦争と歴史学

阿部　猛著　戦争期の歴史学界を解きほぐし、時局に便乗する者、抗する者など、様々の群像を通して、歴史学の社会的責任を考える。

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2
電話03-3813-9151／価格は税別
http://www.yoshikawa-k.co.jp/

タリアというものはわれわれの心中に何らの表象も作らない。シチリアにこそすべてに対する鍵があるのだ」と記している。今回刊行する現代新書『中世シチリア王国』で、多くの人に中世シチリアの魅力を知っていただければと思う。

この中世シチリアの研究を始めて二年後の一九八〇年、私は、ある一枚の美しい絵と出会った。FM放送雑誌の表紙を飾ったレコード・ジャケットだが、その美しさに心を奪われると同時に、大きな衝撃を受けた。シチリア島で美しいイスラム教徒の女性たちに囲まれて生活していたノルマン人の王が目の前に現れたように思えたからだ。満天の星がきらめく青い夜空を背景に、美しい女性が一糸まとわぬ姿でひざまずき、その左手をまっすぐ前にさしのべている。その手の先には、頭にターバンを巻き、紋様の入った黒い長衣を羽織り、彫刻を施された豪華な椅子に腰掛けた君主がいる。女性を見下ろすその視線は伏し目がちで、目を開けているのか閉じているのか定かではない。女性の方は自信に満ちた表情で、君主を見つめている。

「物語を話すシェラザード」と名付けられたこの絵は、カイ・ニールセンというデンマーク出身の挿絵画家によって描かれたものである。私は、この絵に出会ったとき、将来シチリア王国に関する本を出版するときには、その表紙に使おうと心に決めた。そして、雑誌から切り抜いた絵を、机とデスク・マットの間に挟んでおくことにした。こうして、この絵との長いつきあいが始まった。私は研究に疲れると、この絵を見て研究当初の情熱を思い返した。アメリカやイギリスに行くときには、この絵も私と一緒に海を渡った。六年間の海外滞在中、この絵は常に机の一角を占め、私の研究を見守り続けてくれたのである。私の十五年越しの思いは、前著『神秘の中世王国』（東京大学出版会）で実現した。

カイ・ニールセンがシェラザードの絵を描いた頃のパリは、オリエントへの憧れの絶頂期にあたり、オリエントが持つロマンティックなイメージや異国趣味が芸術家たちの想像力をかき立てていた。一九〇七年にアラビアン・ナイトのフランス語新訳が公刊されたことがその大きな理由の一つだった。一九一〇年には、ディアギレフ率いるロシア・バレエ団（バレエ・リュス）が、オペラ座で「シェラザード」を上演している。多くの挿絵画家たちもその影響を受け、美しくエキゾチックな作品を生み出したのである。そして、彼らがオリエントに抱いたこのイメージは、長い間、ヨーロッパの人々がノルマン・シチリア王国に対して持っていたイメージでもあった。そのせいかどうか、シチリアには「千夜一夜」という名前のワインがある。「ドンナ・フガータ（逃げた女）」という有名なワインセラーの赤ワインだが、次にシチリアを訪れる時にはぜひ味わってみたいと思っている。

今世紀の初頭に生み出された美しい挿絵にしろ、中世スペインの素晴らしいアルハンブラ宮殿にしろ、中世シチリア王国の華麗な遺産にしろ、それらを生み出した背景には、私の好奇心を強くかき立ててきた異文化交流や異文化接触がある。翻って私たちが生きる現代世界を見ると、これらの時代や地域よりはるかに大規模に、恒常的に、異文化接触、異文化交流が行われている。私の次の研究対象はこの現代世界ということになるのかもしれない。

（たかやま・ひろし　東京大学助教授・西洋中世史）